〈はじめに〉

ことばのテーブル学習会に、ご参加いただき、ありがとうございます。オープン形式としては、今春につづき2回目となります。

今回の企画にあたりまして、学習会のタイトルを、どのようにしようかと、迷ったのですが、結局、前回と同じ「キーワード～」になってしまいました。どうも新鮮味には欠けるのですが、「キーワード」を有機的に連ねて、お伝えしたいことを表現して行く、という形式が、内容構成を行いやすく、今後も、お話の進め方については、この形を採らせていただこうかなあ、と思っています。ただ、もちろん、内容は毎回、異なります。今回は、人と人との間に、日々交わされている、「会話」について、考えて行きたいと思います。

会話は、よく、キャッチボールにたとえられます。語られた情報が、まるでボールのように、話し手と聞き手の間を、行き交うからでしょう。その場合、通常、重要とされるのは、ボール（内容）と、それをやりとりする二人の人間に向けられています。受け取りやすいストライクの球か（表現される内容の適切さ）、とか、ちゃんと間違いなく受け止めたか（聞き手の理解力の水準）、などのように。それらは、もちろん、とても大切なことではあるのですが、そもそも、まずキャッチボールを行う、行えるためには、何が必要か、を考えてみる必要もあります。

キャッチボールの特色は、人と人が離れている、という点にあります。ボールのやりとりは、一定の広がりを持った空間と、ボールが向こう側に届くまでの一定の時間がなければ、成立しません。すなわち、私たちは、この空間と時間の中で、さまざまな人と、さまざまなコミュニケーションを行っていることになります。じつは、これは会話だけに限らず、花を見てきれいだと思うことも、友だちに会って懐かしいと感じることも、すべて、この空間と時間という、ふたつの間の中で、起きていることです。この二つの間に、人と人が、また人と世界とが歩み寄って、何らかの関係をもつと、花や友だちという「モノ」は、美しいや、懐かしい、という「コト」に変わり、そこに、生きている実感（リアル）が、生まれます。

会話は、そのような人と人との関係性の、まさしく代表選手であり、会話について考えることは、人間を理解して行くために、欠かすことのできないものだと思います。